2026年（令和８年）３月２６日発行　　No.０３１

郷土研通信

ヤナギの雄花

アイヌ語：スス（全道）
神々と対話する儀式に使う木幣（イナウ）はこの木が多い。

発行：てしかが郷土研究会（Teshikaga Regional Studies Association）
北海道川上郡弟子屈町中央３丁目2-10（松橋方）
文章責任：松橋　秀和

近況報告

ホームページの開設

念願であったホームページが開設されました。当町の歴史や文化を知りたい、あるいは偶然このサイトにたどり着いた方が興味をもってくれることを期待します。

URLは[https://www.teshi-ka-ga.org/]です。

コンテンツは順次整備していきますので、ご意見や情報をお寄せいただければ反映して行きたいと思います。

ふるさと歴史館の運営協力

先日の町議会で令和八年度の予算が審議され、「文化財等調査事業」として予算が認められました。

これは、町内の歴史や文化を調査することや「ふるさと歴史館」の運営に対する支援に用いる予算であるとのことで、教育委員会では、この事業を当会に委託したい、とのことです。

事業の詳細については後日、お知らせがあると思います。

辻谷氏蔵書引越し大作戦

三月二二日、九名の有志で行いました。

氏が会社経営の傍ら書斎として使用していたところを、現役を退いたことから場所を空けなければならなくなり、それに伴い蔵書を移動することになりました。

氏は、日ごろから当会の活動に対してご理解をいただいているので、お手伝いをさせていただきました。

むかしむか史に反響

「むかしむか史」No.363で紹介した「弟子屈小唄」に反響がありました。

作曲をした人物の経歴が不明でしたので心当たりのある方はご一報を、と投げかけたところ、読者から親戚にあたるかもしれないので問い合わせをしてみる、との情報が寄せられました。

忘れられていた歴史の一部が明らかになるかも知れません。

勉強会

更科源蔵著「原野シリーズ」を読む
その３
『少年たちの原野』の段
講師　松橋秀和

主人公四郎が九歳になって片道八キロメートルの弟子屈尋常小学校へ通学することになってから尋常科を終えて補習科へ進むまで、その間の弟子屈市街地の様子や学友たちとの交流が綴られていて、これらのことを解説された。

次回の例会

令和八年度総会を開催します。会員総数二十一名のうち半数の十一名が出席しないと総会が成立しませんので、よろしくお願いいたします。

令和八年四月二二日（水）
一九：〇〇
ふるさと歴史館

2026年（令和８年）３月２６日発行　　No.０３１

むかしむかし写真館

No.３６４

更科源蔵著「原野シリーズ」に弟子屈を読む

『父母の原野』の段－その２

松橋　秀和

四郎の父たちが熊牛原野のセタイベツに入植する以前の弟子屈地域はどうだったのかをかいつまんでみると、

明治維新後、明治政府が蝦夷地の統治を進めるため「開拓使」が東京に置かれ、明治２年に松浦武四郎が提案したうちの一つ「北加伊道（北海道に変更される）」が蝦夷地の名称となり、「11国86郡」名が提案されます。

同時期に開拓使は、釧路国川上郡の名称を定めて、厚岸、釧路、川上の三郡を佐賀藩に支配を命じます。

明治４年には支配権を開拓使に戻され、川上郡（クマウシ、トウロ、ニジベツ、テシカガ、クッシャロのアイヌの人たちの集落）は明治５年に開拓使根室支庁の管轄になり、佐野孫右衛門が郡長を兼ねています。明治８年には、アイヌ語地名に片仮名であった村名を熊牛、塘路、虹別、弟子屈、屈斜路の漢字に改められています。明治13年には、川上郡は根室支庁厚岸郡役所が戸長事務を執るようになり、明治18年に熊牛村に川上郡五村を管轄する戸長役場が設置されています。

テシカガ地方では、明治５年に佐野孫右衛門がアトサヌプリの硫黄採掘を試みて明治９年に試掘し、明治10年から本格的な鉱山開発が始まり、和人の往来が多くなってきました。

明治16年、トウロに住んでいてアイヌの人たちと交易していた本山七右衛門が、出身地の加賀が温泉地であったことからテシカガの釧路川の淵の葦原に温泉が湧いていることで温泉場を作るべく湯治小屋を明治17年に作り、明治18年に一家を連れて定住することとなります。和人で最初の定住者です。

この温泉の湧くところとは、松浦武四郎の『久摺日誌』では、現在のJR摩周駅付近にあったコタンに宿泊した翌朝、クッシャロを目指す際に釧路川の「西岸に渡り弐三丁上るや、川岸に温泉有、其所江鹿多く群り泥を食ひ居たりけるが、…」とある場所と思われます。

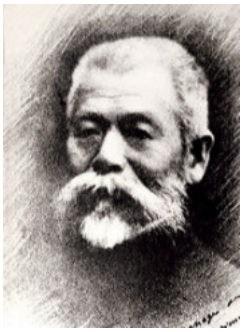
本題に戻ります。

四郎の父たちが明治23年に入植した場所は、熊牛原野のアイヌ語で「セタイベツ、犬（オオカミ）がいるところ」と言う川があったところで、現在は明渠となっていて川はありません。

翌年、故郷新潟の人たちにここに入植するように声を掛け何人かが入植し、セタイベツが賑やかになってきました。『弟子屈町史』では、吉田忠吉、高野由太郎、更科寅平が入地したとあります。

四郎の父たちが北海道へ渡ろうとした理由に考えられるのは、明治14年に起きた開拓使官有物払い下げに端を発する政変で、大蔵卿だった大隈重信が罷免され松方正義が大蔵卿に就任して紙幣整理等の経済変革を行い、世にいう「松方デフレ」で地方の農民たちが借金の返済で農地を手放すなど疲弊していた時期であったので、この影響を少しでも避けるためではないか、併せて後の明治32年から始まる御料農地移民へと繋がるのではないか、と筆者は考えています。

この松方正義の財閥主導の経済政策に異を唱え、地方産業振興の独自の経済政策「興業意見」を農商務省大書記官前田正名が提言しますが、松方正義の抵抗で跡形もなく修正されてしまい、挙句の果てに閑職に追いやられたのが、のちの阿寒国立公園（現阿寒摩周国立公園）の基礎となった土地を守る「前田一歩園」の園主「前田正名」です。「前田正名と阿寒摩周国立公園」については、いずれかの日に別稿で解説することができると思います。


前田正名
（前田一歩園 HP から）

（つづく）

原稿募集

てしかがに関することで研究された、あるいは新しく発見したことなど、原稿にしてご投稿下さい。